



その先読みは本当に“先読み”か？

別段何も無かったのに遅刻してしまったり、ダイエットを決心したのに計画倒れになってしまったり…「その行動の結果、次にどうなるか」を考えていればこうした事態にはならないはずだが、残念ながらこの種の話は巷に多く溢れている。人は、あまり深く“先読み”を行わない傾向にあるのだろうか。

これに関する、ある示唆に富んだゲームを紹介したい¹⁾。ゲームの参加者は、0~100の整数の中から数字を1つ選び、それが“当選番号”であれば商品を獲得する事ができる。ただし、当選番号は参加者達が選んだ数字の平均値の2/3に最も近い整数に決定される。例えば平均値が30であれば、20が当選番号となる。つまり、当選するためには、他の参加者がどの数字を選ぶのか予測しなければならない。さて、あなたならどの数字を選択するだろうか？

一見すると不確実な当選番号だが、実はこのゲームには“あるべき正解”が用意されている。仮に参加者全員が最大値の100を選択したとすると、当選番号は67となる。つまり、当選番号が67を上回る事はあり得ない。ここで「他の参加者達もこの事に気付くだろう」と考えれば、誰も67よりも大きい数字は選択しないのだから、選択される最大の数値は67となる。この時点で当選番号が45を上回る可能性は無くなるが、更に他の参加者もこれと同様に考えるだろうから…と先読みしていくと、選択可能な

数字は次第に小さくなり、最終的には0となる。

しかし、実際にゲームを行ったところ、ゲーム理論学者であっても0を選択した者は少数であったという。この結果から「人は深い先読みを行わない」という示唆が得られるかもしれない。一方で、0を選択した参加者が結果的に当選者になれなかったという事実もまた興味深い。正解であるはずの0の選択は、勝率の高い戦略ではないのである。この齟齬は、0を導く考えの根底にある「全参加者が自

分と同様に合理的に考える」という前提条件から生じている。現実世界に“情緒的な人”が少なからず存在する事は自明であり、そしてそれを織り込んで数字を選ぶ参加者も存在するだろう。こうした他の参加者が持っているであろう当然の思考に注意を払わず、上記の前提条件に立って合理的に答えを導いた事が、現実

に即せば合理的ではなかったのである。

金融理論は言うに及ばず、多くの物事はその背後に様々な前提条件を置いている。冒頭の例のような失敗を繰り返してしまうのは、計画がまずいからではなく、ひょっとして計画を作る際に置いた前提条件に問題がある場合も多いのではと、今朝も駅までの道を走りながら思う次第である。（須貝 悠也）



1) 行動ファイナンスの実践, 2005, James Montier